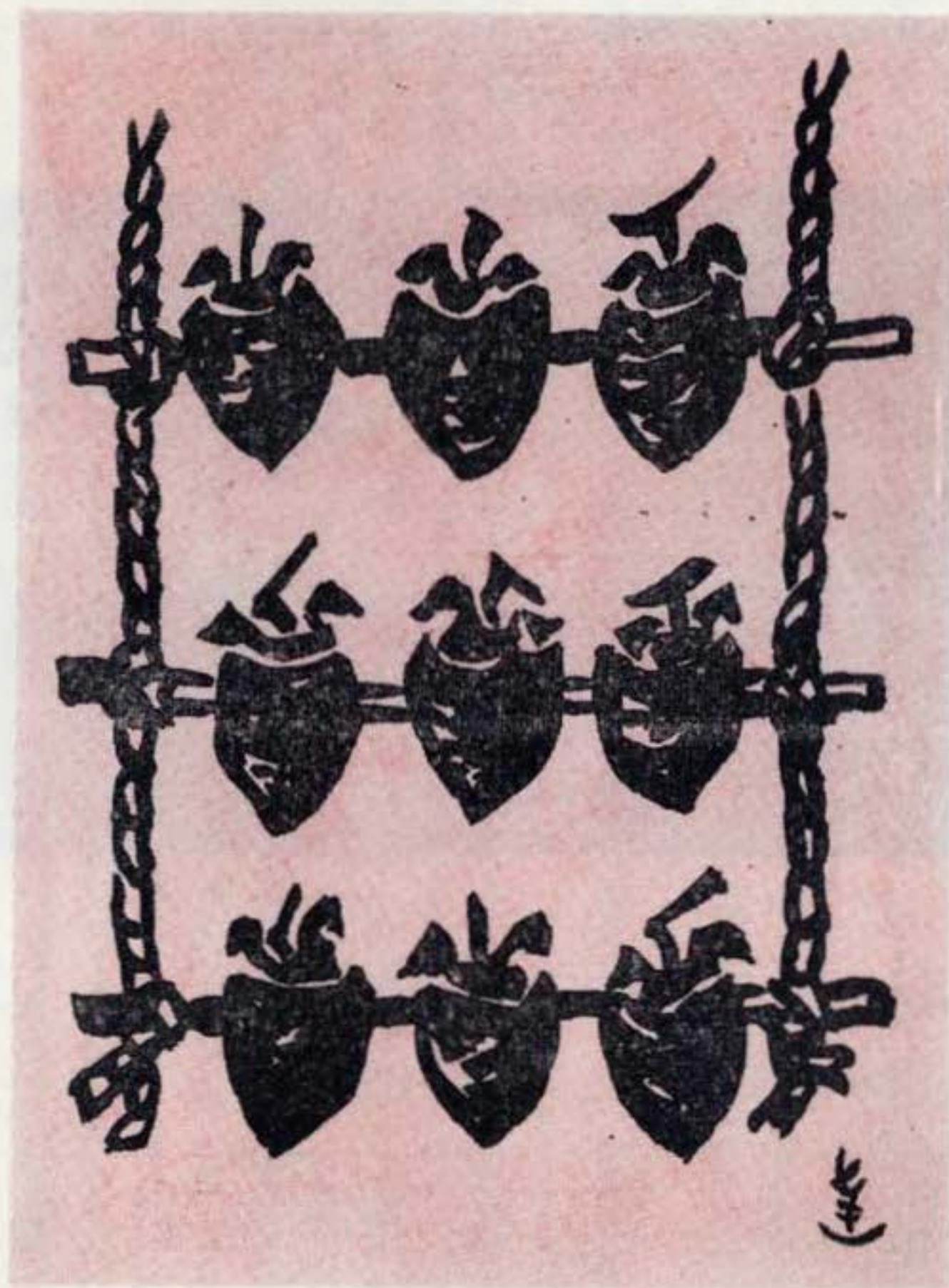


浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別取扱承認誌第三五二号)
昭和四十五年十月二十五日印刷 昭和四十五年十一月一日発行

第三十六卷

第十一号

目次

表紙「干柿」松涛達文画

法燈かがやく＝聖蹟大日比西門寺参拝＝……………	佐藤治子……………	(2)
詩歌にみる宗教心《下》……………	藤吉慈海……………	(6)
新刊紹介 玉山成元著『普光観智国師』……………		(10)
念仏生活シリーズ 念仏への郷愁……………	安井香山……………	(12)



ふる里紀行(2)『東北の』1……………	大屋瑞彦……………	(17)
和来ばなし(3) 茗荷のたたり・生きていたら自慢……………		(18)
信……………		(20)
「道」(7) 菩提寺の道……………	高橋良和……………	(23)
インドでの旅日記(4)……………	佐藤治子……………	(26)
宝物シリーズ(11)藤原定家像……………		(32)



今月のことば

葦間の月

秋も深くなりました。

秋の来る度に、わたくしは法然上人の諸人勸化の御言葉に示された葦間の月の譬えを想い浮かべることです。

「たとえば葦のしげき池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よくよくたちより見れば、葦間をわけてやどるなる。妄念の葦は茂けれども、三心の月はやどるなり。」

ひとは、生きる上にさまざまな欲望にとりつかれます。むさぼること、いきどうつこと、ぐちること、これらのさまざまな迷いもそこから生れてきます。行いすました清僧も時には煩惱のほむらに悩むことがないとはいえません。久米の仙人の話も、歌舞伎の鳴神も全く同じ趣向のもので、本能の根強さを物語ってやまないのです。

西洋にも同じような話は数多いのですが、例えばアナトール・フランスの小説タイスでは、いばらの鞭によって色欲を制した修道僧パフヌシユースが、街の美しい娼婦タイスに惹かれ彼女を救おうと神の道を説き、これによって信仰に目覚めた彼女が尼僧院に去るに臨み、残された恋をもだえて、この世にあるのはただ肉の恋のみだと、嘆いています。

所詮、人間は煩惱のとりこなのでしょう。法然上人は、煩惱を断とうとするのは結局生身の手足をもぎとろうとするようなものだ、とさとされています。肉欲に血まみれた娼婦に却って神の救いが現われるとの逆説的なタイスの構成は意味ありげです。地獄の身だからこそ浄土への道は開かれるのです。煩惱具足の身の故に仏の導きを常に願う心が必要です。煩惱を心の客人とし念仏を主とせよと、上人は説かれています。

(中村康隆)

法燈かがやく

— 聖蹟・大日比西円寺参拝 —

浄土宗寺庭婦人会長 佐藤 治子

山門

秋の陽の強い日射しの中を、車から降りたった私達浄土宗寺庭婦人会（増木副会長と私）は、荷物を預けたくも昼近い青海島の大日比は、しーんとして誰もいない。目の前には五、六段の石段に続いて石畳の坂が生垣にそってゆるやかなカーブをえがいている。照りつける日射しの中を、手分けして荷物を持ち上げ、ゆっくりと歩き出した。下の道からは見えなかった山門は、すぐそこに！思わず山門を見上げた時、枯れきった美しさともいうべきか、色彩も影をうすめ、木地のままの素朴な美しさ。私は石畳の長さも、引きずるように持って来た荷物の重いことも忘れて、山門に吸い寄せられるようにたどりついてしまったのかも知れない。山門の両脇にめぐらされた腰板の木ぼりの美しさに、嘆声をあげてしまった。四君子があざやかに、実に美しい浮きぼりになっている。どこかで見たおぼえのある形の山門は、西円寺の御住職綿野上人に伺うと、桃山時代の建築で毛利家の菩提寺にあったものを、萩の信者より寄進され、移築されたものであるとのこと。京都の転法輪寺の山門に似た感じは、同じ関通流様式であったのだ。暫くはそこに立ちつくしていた私達は、道をへだてた入江から吹き来る風に、旅の疲れも、きびしい暑さも忘れてしまったのである。

律院西円寺様

美しく掃き清められている本堂の前庭を「受付」とはり紙された玄関へと進む。本堂の右は女子の入口、左端は男子入口と分かれている。

折から玄関近い広間を通りかかれた山主様は「さあさあ何卒」と、ニコヤカに私達を招じ入れて下さった。「まあこちらへ」と、御自ら案内に立たれる後を二人は、そのまま広間を通りぬけ、奥まった書院へと続くふき抜けの廊下を渡る。岩崖にそっている長い廊下の所々に、花をさした吊りかごがかけられ、婦人会の私達会員を心して客受けして下さったにちがいない。白萩に特に心ひかれる。女人禁制のこの律院に、誰が生けし花なるぞ、と感嘆の声も出ない。

回廊の右の中庭には、三代法道上人が夢のなかでみられた設計により建てられた、夢中感見の法蔵がある。チリ一つない書院の奥の一間に招じられた私達は、木立の向うに見える紫津浦から吹きぬける微風に、何とありがたいことだろうと、もう感激で一杯である。山主様の入れて下さる玉露に恐縮し切ってしまったのである。午後より始まる寺庭婦人会中四国ブロック研修会に出席するまでの一刻を、静もりかえっている奥の書院でくつろがせて下さる御心入れに、旅の疲れなどふきとんでしまっていた。

大日比といえは「ああ三師上人のお寺ですね」と、一口にいわれる、この老師法岸上人・先師法洲上人・尊師法道上人の三上人のことは、現在の山主綿野上人が研修会の最初の講師として委しく話して下さった。この御法縁をよくぞ結ばせて下さったと、主催の山口教区長様と教化団長様他役職の上方に、只々感謝するのみであった。

お念仏道場としてきびしい戒律を設けられた女人禁制のこのお寺は、西の高野といわれている。特に今回は寺庭婦人の研修会ということで、私達を受け入れて下さったのだ。不思議な御縁で、その日は『道心の中に衣食あり』という言葉そのままの、御先代のお命日であるというの何かの御因縁で

あろうか。

夕方のお念仏の時、大日比流といわれるお念仏の称え方で勤行を進められた。お念仏を称える私達も心は一つになったように、一すじに御本尊様を仰ぎ、合掌する手の指先まで力が入っていく。

夕食のおいしかったこと！村の女の人達五六人が西円寺様の僧侶方の指図でテキパキと、しかも心あたたまるおもてなしをして下さった。品のよい味のつけ方！心のこもった精進料理である。四国から広島から、そして地元の教区から多数参会された会員達は、和やかに、静かに本当に心一つになって、あたかも三師上人様方に見守っていて頂いているかのように尊い時を過していくのであった。

夜は一堂にテーブルをかこみ、教区長様、教化団長様の指導の下に座談会が始まり、直接司会の役をもたれた主催教区の会員の手際よき運営ぶりに、和やかに会は進んでいくのであった。

二日目

五時起床。六時より御朝事^{あさじ}。勤行半ばに導師の山主様はつと立たれた。次の間まで若い僧侶の方により運ばれた御膳を受けとり立たれた山主様は、これをささげもたれ御霊膳を御本尊様に供えられ、また次の御霊膳を拜げもつ僧侶の方から受けとられては御供えするという風に、順に七膳ほど供えられたのである。毎朝このように御朝事が勤められていくそうである。

念仏道場としての御本堂の内陣、外陣の柱もみがきにみがかれて、御仏壇の荘厳もはやかな色彩は一つもない。それだけにむしろ心の奥までしみ通るようなきびしさが感じられる。三百年も続いている律院のきびしさなのだ。身がひきしまる、けれど元祖様の御教えを受けつがれた三師上人の、またそれを受けつがれて現在に至っておられる上人方の温容なお姿にいだかれて、今私達は広い道場の一ヶ所に合掌しておりますと、お答えしているかのようなあたたかな血の通い合う感じさえるのである。南無阿弥陀仏を称える有難さ。私には地理的の遠近は感じられない。この山口県の西の果ての、この聖蹟に元祖様の御教えはこんなにも生き生きときびしく、そしてあたたかに私達に法悦をか

みしめさせて下さるのだ。何とありがたいことであろう！

尼寺法船庵

八時から講話の始まる前の時間を私達は、山の向う側の尼寺法船庵へ伺う。広い稲田から時々雀を追いちらす空砲が静かな村になりひびく。お寺への崖道の下の一隅には尼僧さん達手作りの畠がある。きちんと整理された畠には菊も植えられてある。道を掃いていた一人の尼僧さんは私達一行が登って行くのをみかけ、スタスタと急いで小門へ入られてしまった。

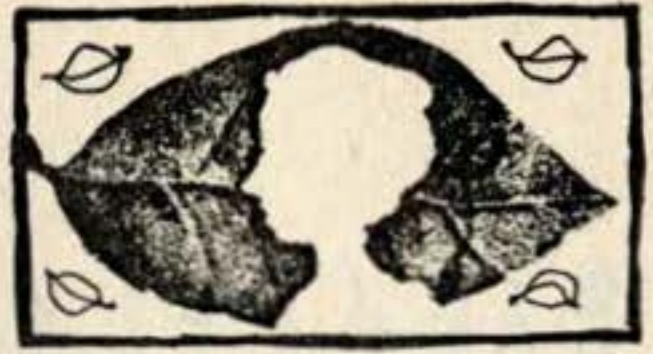
中に入って山主様が「御早う」と声をかけられたが、障子の向うに影はうつるが誰も出て来られない。『一、男子禁制云々』からはじまり、きびしい掟めを書いた額がかけられている。百五十年間も、一に掃除、二に勤行を実行してこられ、みがきこまれた御仏間で御山主様の導師で一同お念仏を称え、静かにおいとましたのであった。

法岸上人の御隠居所は尼僧さん達の人数もふえ家もせまかろうとの御遺言で、ここを提供されてより百五十年も尼僧さんの道場となり、現在も固く門を閉ざし修業に専念されているのである。

西円寺様のお本堂へ戻る時、山主様のいわれるには、この本堂の左奥に尼僧さん達の出入口があり、本堂の左奥の間は休憩所にあてられるとのことであった。

『教化は胎児より』の教化行動は子供の教化、そして家庭の中心となる主婦のため、早くから婦人会を設立された由。日曜学校は主界で最も古いものだそうである。寺庭にある私達は「ようこそ迎えて下さいました」と、只々有難さで一杯であった。誰方の顔も心からの法恩を感謝する気持で清々しく明るい。

法然上人の御教えが西円寺様を中心に村全体にしみ渡っている青海島の大日比のこの律院に過させて頂いた二日間は、尊い得がたいものであった。ここより九州へ帰えられる副会長さんと、石見・出雲の教区訪問に廻る私は浄土宗の寺庭にある律せを胸にしっかりと抱き西円寺を辞したのである。



京都・花園大学教授 藤 吉 慈 海

詩歌にみる宗教心 △下▽

西田幾多郎先生はまた、

わが心深き底あり喜も憂の波もとどかじと思ふ

とうたっておられます。この喜怒哀楽の情のとどかぬ底にある深き心こそ大信心といわれるものです。それは仏心といってもよいでしょう。このような仏心を自覚し、仏心に生きることこそ大切なことであって、本当の仏教徒とは、このような仏心にめざめた人のことであります。

仏教では信・進・念・定・慧の五根を教えています。根とはインドリヤという梵語の訳で、目には見えないが、一つの潜在的な力を意味します。信心があれば自から精進の気持がわいてまいります。精進すればそれが力となって精神が集中し、念・定・慧とすすんでまいります。

人間も毎日心を静めて精神を集注する訓練をしませんと、だんだんぼけてくるようになると思います。念仏でも坐禅でも、毎日これが続けてやれといわれますのはそのためです。はじめはいやなものです。毎日つとめてやっていきますと、自らはげみがついて、やらずにおれなくなってくるのです。それが精神根といわれるものです。深く根を培うというのもそういう意味で、この潜在的な力をつけることが大切です。

根性というものは、このような潜在的なバイタリテイをいいます。根性といいますと、すぐ特訓とかしごきを連想しますが、そんな一時的な訓練ではなく、永続的な心がけが大切です。根性くされとかしようねをすえるというのも、

このような潜在的な力に関することです。ひとつしように根をすえて仕事をするか、と男が立ちあがるとたのもしいものがあります。

次は交通事故で主人を失なった夫人の話ですが、彼女は京都女子大で学ぶため私の寺から通っておりまして。その後福岡県のある鉄工所に嫁ぎました。一ヶ月程前主人は商用で広島へ向ったのですが、途中睡魔におそわれたのでしょう、正面衝突し、この世を去ってしまったのです。何んとも悔みのことばがでませんでした。その後父親からの連絡で、鉄工所をやめるためには六十人の従業員に多額の退職金を支払わねばならない、そんな余裕もなかったので、彼女が女主人として鉄工所を続ける覚悟を決めたとのことでした。

そんな彼女のその後の状況に心配いたしていましたところ、一通の手紙をいただきました。それによりますと、あまり突然のことであつたので、未だ本当のことだと思えない、仕事に出て、そのうちに帰って来るような気さえます。しかし、事実は事実として受けとめねばなりません。できれば店をしめ気楽になりたいが、従業員のことを思えばそうもいきません。助けをかりて続けることにしました。こういう気持ちになれましたのも、若い頃、痛い足を我慢して念仏を称え

たり、坐禅したりしたことが役にたっているような気がいたします。以上のような前向きの姿勢の便りをいただき、心安心いたしました。

御世辞かも知れませんが、私の寺にいた頃の念仏や坐禅によつて得た心持が役立ったといっているのです。人にはいつ不測の事態が起るか分かりません。日常性の中に埋没して、自分にはそうしたことが起ることは考えてもいないのが現状でしよう。いざそうした事態に直面した時、それを乗りこえることのできる日頃からの訓練が必要です。つまり目には見えないバイタリテイ、根性をうえつけることです。ノイローゼになったり、自殺することをよく見かけますが、こうした力の不足が原因と申せましょう。これをふせぐためにはうちなる心、心根が確立していなければならぬのです。

冰山をたとえにとりましょう。冰山は一对九の割合で海に浮いております。船舶は小さな冰山でも細心の注意をはらうのはこのためです。人間の心もこのようなものなのです。腹黒い人などといいますが、顔だけ化粧しても、その下にある身体はどのように考えているか分かりません。一方竹を割ったような性格の人もおりますが、大部分の人びとは表面のみをくつろぐことのみに終始いたします。人によっては日記を書

く習慣をもっております。しかし、この日記にさえ本当のことを書けないものです。誰かに見られはしないかという心が働くからです。そこには潜在意識が働くためです。この分野は心相心理学でいろいろ研究されておりますが、仏教では遠いインドの昔から、人間の心は八つに分けられて説明されていきます。

眼・耳・鼻・舌・身の人間の身体の部分によって感じとりますのを前五識といい、この五識によって感じとったものを総合判断し、統一するのが第六識の意識です。そして人間は思惟する力をもっていますが、その考え方がどうかすると自己中心的になってしまいます。その自己中心とする考え方、つまり我見・我痴・我慢・我愛などの煩惱の心を第七末那識としてたて、その第七末那識が私である、根本である（種である）とする第八アラヤ識をたてております。

少々むずかしくなりましたが、遠い昔のインドですでにこうした考え方が研究されていたのです。たとえば唯識二十頌という書の中に、僧侶が昼間おまいりに来た婦人の姿をその晩の夢の中にみたという話があります。どうして夢の中にみるのか、それは自分では意識のない潜在的な心が働くためです。久松先生とヨーロッパへ行った際、スイスで心相心理学

の大家ユンク博士にお会いし、いろいろ話しましたが、博士は自分の最終的な研究の課題とインドの唯識学とは相通ずるところがあるといっておりました。

このように人間には目には見えない心の働きがあります。実際には見えてはきれいな顔もしておれませんから、こまる問題もでてまいりましょうが、こうした心の働きが実際には一番問題とされるところです。人から話しを聞き、なるほどと思う。その思う心、ふれを聞熏習といいます。この分ったと思うことは自分の心に影響を与える、目には見えませんが、西田先生のうたわれた「わが心深き底あり」という心の働きと通じるところです。そしてそこにめばえた大信心を大円鏡智といっております。

この域に達すると、夢また清しということになるのです。どんなに徳をつんだ人でも仲々仏さまや天子の夢はみない、何か人にはいえないようなはずかしいような夢をみる場合が多いでしょう。それはいまだ腹黒い考え方があり、大円鏡智のような心に達していないからであると唯識の学問では教えております。

こうした心はどうしたら持ち合せることができるでしょうか。そのためには幾遍もお念仏を称えたり、坐禅をしたり、

お話を聞くことによって、なるほど信仰とはそういうものか、人間の心の底にある清らかな仏さまの心のようなものであるのだと分ってまいります。こうした善い行ないをくり返えすことによって、その行ないが習慣となり、性質となつてまいります。所謂仏性といわれる仏さまの性質といわれる心の働きの域にまで達することができなのです。ですから幾遍も習い習って性質となるようにならなければなりません。

たとえば皆様は新聞を楽に読むことができるでしょう。これは学習を続けてきた結果です。学者になるためにはそれなりの努力が必要です。英語が分るようになるためには本を読み、ラジオ・テレビなどで絶えず接することによって自分のものにすることができましょう。何かを表現する場合、初めは恥かしい場合もありましょうが、一度ふつといつてしまえば、それが自信となりあとはすらすらでてくるようになります、増々うまくなつてまいります。このように幾遍もくり返えすことによって、それが性質となり、あの人は立派な人だという感じを与えることができます。本来はおとなしい人でもゲバ棒をふり回している人は、いつしかトゲトゲしい感じを与えるような人になつてまいります。人間とはこのようなものです。その人の日頃の行為が心の中にあらわれてまいり

ます。

こうしたことより日頃の修養がおろそかにできないこととなります。目には見えないが心の底にある信根がありませんと、バイタリテイもでてまいります。

この集中力をもつためには、永遠なるものにあこがれていく、道を求ようとする信根がなければなりません。このためには聞熏習といわれる法を聞くということ、目には見えないが心の底からあらわれて、それが大きな円い鏡のような仏ごころになつてくる、それが自づと顔かたちにあらわれて、深みのある内容のある美しい人になつてくるのです。

訂正

先月号のうち、十二頁下段「こういう天子のように」の子を、使に、十四頁上段「長崎家政短大」を「長崎活水女子短大」に、「たかむらにいざよひしは」を「たかむらにいざよひいしは」に、「久松先生の書かれた」を「久松先生に与えられた墨絵に」、同下段「この世界の恋は」を「この世の恋」に各々訂正、また十四頁下段「西田先生はまた寸志日記の中で」に続けて「どなたの作か忘れましたがこんな詩もあります」をつけ加えさせていただきます。藤吉先生にご迷惑おかけしましたこと、お詫び旁々訂正させていただきます。

『普光観智国師』

本書は「中世における浄土宗の展開」「浄土宗三代の確立」「近世浄土宗発展の基礎」など、近年精力的な研究を数多く発表さ、浄土宗史研究の新機軸を開きつつある大正大学助教授・三藤文化研究所員の玉山成元氏の最新力作である。

その内容は

- 一、存応の出生と修学
- 二、徳川家康と存応との結びつき
- 三、念仏論争と存応の活躍
- 四、増上寺の復興
- 五、伝通院の再興と江戸城の宗論
- 六、存応国師号を賜る



- 七、増上寺の地位と弟子の入寺
- 八、徳川家康の信仰と存応との法談
- 九 存応と浄土宗政
- 十 廓山の勉学と大坂の陣
- 十一 元和法度とその内容
- 十二 関東十八檀林の制定
- 十三 晩年の存応
- 十四、存応の門下
- 十五 むすび

以上、十五編より構成され各編ごとにも一つのまとまりをもっている。

『普光観智国師』といっても皆様にはあまりおなじみのない名前かもしれないが、著者

も副題を付けているように、「近世初期における浄土宗の発展」に非常に功績があった増上寺中興十二世源譽慈昌存応の国師号である。国師号は禅宗僧侶の専売特許のように思われているが、浄土宗でも室町時代に浄華院の等熙が「慧照国師」を許された例がある。

源譽存応は將軍徳川家康の強力な推薦によって、慶長十五年（一六一〇）七月、後陽成天皇かな普光観智国師の号を許されている。この後崇伝が本光国師号を許されるが、当時としては珍らしい例である。国師存応は徳川家康のもっとも信仰厚かった僧であり、存応は家康と師檀の契約をむすび、増上寺を幕府の菩提寺として確固たる地位をきずくとともに、檀林制度などによって有機的な関東浄土宗教団の興隆に力のあった僧である。往時には天台の南光坊天海や禅の金地院崇伝をしのぐほどの勢力をもっていた。このことは辻善之助博士の名著『日本仏教史』の中にも存応

のために一項を設けられていることから裏付けられる。しかしこのような対外的な評価に比して、従来、浄土宗史上における存応の取り扱い方はきわめて貧弱であった。存応の伝記やパンフレットのな書物は二、三あったが、これらは盲目的に存応の高僧傑僧ぶりを伝えるだけで充分なる研究成果にもとづくものではなかった。そしてこの理由を存応に関する史料が残っていないためであると説明されてきた。

これらの従来の主張を快しとせず、敢然と反撃の矢をはなれたのが今度の玉山成元氏の『普光観智国師』である。著者は浄土宗に流れる宗史軽視の風潮に対抗して、長年浄土宗史の関係史料を着々と集められてきた。これらの手持ちの中から国師存応関係の史料を整理し、まとめられたのが今回の著書である。そのため本書の中では特に史料による裏付けとすることに留意され、各編の末尾には

重要引用史料が全て列挙されている。しかもこれらの引用史料は全て歴史研究の上でもっとも良質の史料とされる古文書・古記録で網羅されていることは特筆に値することである。これらの史料により裏付けられた本文は非常に格調高く信憑性の高いものであるといえる。これは著者がはしがきでも述べているように、従来の浄土宗史の研究方法に飽きたらなかった著者が今後の宗史研究の指針を示すために、あえて繁鎖になることを覚悟とられた方法であらう。

また第二の特長は個々に史料の例証を求める実証的な研究方法をとりながらも、表現方法は史料の羅列による無味乾燥に流れることなく、また専門的にならないように全ての史料を著者自身の体験の中で総合的に判断し、表現はできるだけ平易に誰れにでも理解できるようにつとめていることである。そのため専門以外の方々は史料をとばして読んでも充

分理解できるように留意されている。

そのため従来、観念的に「えらい人」「立派な人」とだけ教えられ、人間離れをしていた国師存応が、本書の中では我々と同じ人間であり色々な問題に喜び、悩み、苦しんでいる様子が生々と伝わってくる。これは著者が観念的な高僧論を否定し、高僧の人間性を浮きぼりにすることによって、現実的な評価を試みようとした成果であらう。

また第三に本書は著者が長年大学で授業された講義録の集大成であり、僧伝研究の入門書としての機能ももっている好著である。

以上、長々と駄文を労したが、本書の味はとても筆に尽しがたい。百聞は一見にしかずとか、是非皆様に一読をおすすめしたい。
(昭和四十五年七月一日刊、白帝社、B5判 定価一八〇〇円)

尚、もよりの書店で手に入らない場合は、大正大学史学研究室(〇三、九一八 七三一 一)へ御連絡下さい。(宇高良哲記)

|| 念仏生活シリーズ || 3 ||

念仏への郷愁



安居 香山

まだ私には、自分の念仏生活を語るだけの資格はない。もっと言えば、本当に念仏を申しているのかさえ疑問である。この記録は、私の念仏生活の歷程にすぎない。

敢えてここに「念仏への郷愁」と題したのは、それなりの理由がある。私と念仏との結びつきは、已に五六歳の頃から始まる。念仏信者であった父は、檀那寺の二三人と申し合わせて「念仏会」なるものをつくり、毎月二十五日の夕食後寺に集って一時間ばかりの別時念仏をやり、終って茶ばなしに、住職の法話を聞いていた。各人は自分の家の木魚を持ち寄って念仏を申すのであるが、多い時には十四五人も集っていた。母もいつも参加して

いた。そんな時、ときどき私も母とともに寺に行った。勿論五六歳の子供のことであるから、念仏を申したわけではない。別時念仏が始まるころは、本堂に響く木魚の音を子守歌がわりにして、母の膝枕でスヤスヤと寝ていたのである。そして、茶話しに入ると、目をバッチリかけて、お菓子をほうばった。念仏会への参加は、私にとっては菓子が目的であったのである。しかし私は、あの木魚の音を聞きながら、母の膝枕で寝た記憶に無限の郷愁を感じずにはいられない。それは又、今は亡き母への郷愁でもある。

滋賀の田舎では、一般的に仏教信仰が盛んである。朝夕の勤行は、どの家でもきちんと言われる。特に念仏の



時は、小さな伏せ鐘（鉦）を打ち鳴かす。キンキンとかん高く響く鉦の音が、朝早く、夜遅くどこかの家からも響いてくる。すがすがしい秋の朝など、まだ寢床の中でウトウトしながら聞いた鉦の音は、子供の頃の郷愁となつて、私の脳裏から去らない。已にその頃、私は簡単な勤行は覚えていた。門前の小僧、習わぬ経を知っているたぐいである。在家育ちではあったが、父母のこうしたしつけは、なかなか厳しかった。

仏門の生活は、十歳の時の京都の寺生活から始まるのであるが、あわただしい私の前半生は夢のように過ぎ、戦争から敗戦へと人並みの苦労はしてきたが、寺生活は小僧であることとて、私なりのものは何もなかった。しかし、降ってわいたような幡随院という大寺の住職は、

大きな念仏生活の試練を私に与えた。そこでは、毎朝五時半から七時頃までと、夕方には約一時間ばかりの念仏を申すのが日課となっていた。その頃は已に結婚をして在家的生活をしていたので、全く天地をさかさまにしたような私の生活変動であった。

私は丸々そこで五年の生活をしたのであるから、お念仏の数も随分なものであったと思うが、一向にその間に念仏の有難さを体得できなかったとは、まことに愚鈍のいたりであった。未だ若かった私には、日課の二時間半の念仏は、まことに苦難の道であった。日課なる故に申さねばならぬ念仏、念仏の流れを汲むものである故に申さねばならぬ念仏、愚鈍の身になって申さねばならぬ念仏であるということとは百も承知ではあったのであるが、他によって強いられたこの念仏は、少しも私の血となり、肉とならなかつた。そして、徒らに時間と労力の浪費のように思えた。この時間に、何冊の本が読めるであろうか。そんな邪念のおこるとき、私は無性に鉦を打ち鳴らした。多くの妄念に駆られていた五年間の念仏生活は、まことに実り少ないもののようにであった。

その後私は寺を去り、再び大学生活を中心としたサラ

リーマンに帰り、あわただしい生活に明け暮れた。引越した友人の家は、兼務の名ばかりの寺であったが、立派な立像が、形ばかりの仏間に飾られていた。不思議なもので、さて在家生活に入ってみると、かつての念仏生活が無性に恋しくなってきた。何か朝夕お念仏を申さないと、心の何処かに空洞ができていくようで、一日中落ち着かなかった。念仏をしない時は、何か悪いことをしたようで、うしろめたかった。そんなわけで、寺生活の時ほどではないまでも、私は心のおもむくままに念仏を申し、日々の生活に出掛けて行った。

つい三年ほど前、今の地に私は私の家を建てた。それは安サラリーマンにしては過ぎた家ではあったが、生活の為の最小限の家であるため、勿論、仏間などはない。結婚直後に買った在家用の小さな仏壇が簞笥の上に乗っているだけである。そのみ仏は、西山如拙先生に刻んでいた白檀の、まことによくできた坐像であるが、簞笥の前で坐つての念仏は、あたかも棚経に檀家の家に行ったようで、余りにもみじめであった。とても私の心行く念仏にはならなかった。朝夕お線香はあげるものの、僅かにお十念を唱える程度で、心は淋しかった。

折しも、私の敬愛する萩原貴光先生が急逝された。私の心のオアシスが一つなくなった。そんな時、未亡人に何ということなしに、

「念仏をするお堂が欲しい」

と話していたら、

「建てたらどう。追善のため私もできることはするか」

と笑いながら言っておられた。その時はそれ程に思っていなかったが、いざ「これを基金に」と請われて、私は人事のように驚いた。佐藤・竹中両先生などに相談したら

「そりや結構だ、大いにやれ。すべてそうしたものには有縁無縁の力によってやることに意味がある。寺堂建立とはそういうものだ。援助しよう。」

と、話は、私の思わくとは裏腹にどんどん進み、「お堂が欲しい」という私の夢は、現実のものとなって、この三月二十八日、故郷の本家の仏像を遷坐申しあげて、入仏落慶供養をいとなむまでになった。み仏の御縁というもの、有難さをつくづく感ずるとともに、有縁無縁の力に生かされるこの生活を、感謝せずにはいられない。そ



内部にかかる額の筆による主門浄土岸

れにしても、このお堂が完成した三月十八日に、わが母は忽然と世を去ってしまい、膝枕をして聞いた念仏も、今や全く過去の思い出としてのみ残るということは、何んと人生は皮肉なものであろうか。

お堂は一間半四面の小さなものであるが、中は総檜で飾り、簡素ななかにも莊嚴味が溢れている。静かに念仏を申しているとき、無限の法悦にしたり得ることは、ま

ことにめぐまれた人生と思いを新たにせざるを得ない。正面に岸浄土門主より頂いた「貴光寺」の扁額を飾り右の位牌壇には、三界万霊と共に、今までお世話になった方々のお位牌を安置した。左の床の間には、法然上人のお名号や、季節季節の軸物を掛けることにしている。最近、友人たちが金色の華蔓を正面に飾ってくれて、一段と輝きを増した。

去年の夏、中学二年になる私の息子が、私の故郷の宗教事情の調査をするため、各家を廻ったことがあった。その時、或る家に行ったところ、

「安居さんの息子さんですか。それでは一寸お経をお願いします」

と奥坐敷の仏壇の前に通されてしまった。

「何も知りませんので」

とことわってしまえばよいのに、気の弱い息子は、そのまま仏壇の前に坐ってしまっ、全く困り果てた。窮余の一策として、

「南無阿弥陀仏、ナムアミダブツ」

と小さな声でやってきたという話で一同大笑いとなった。「来年までには、何んとかお経を覚えておかないと、

琵琶湖で泳ぐわけにもいかんなあ」

そういいながら頭を掻いたので、又一同大笑いをした。そんなこともあるのか、今では鬼子も言われるままに素直に本堂で一緒にお経をあげている。小学三年の妹の方は、木魚を叩くのが、なんとしても面白いばかりに、これも一緒になってお経を聞いている。

「兄ちゃん、当雨珍妙華というのはどこにあるか知っている」

そう言って妹は「四誓の偈」の最後のところを示して、いかにもほこらしげであった。面白がって木魚だけ叩いていると思ったら、門前の小僧も、ちゃんと習わぬ経を知っているというところである。

随分、自慢ばなしめいたこの記録も、しかしながら、いつわりのない私の念仏生活の記録である。それにしても、母の膝枕で聞いていたときからすると、もう四十年もするこの念仏生活である。それにしては、未だに念仏が郷愁のみに止まっているようで、法然上人の教えられた愚鈍の一向専修でないということは、私の念仏生活の何んと未熟で、救われ難いことであらうか。まさにこれは、懺悔の記録である。

御年始のご挨拶がわりにご用を

『浄土宝暦』

・一部25円（50部以上より単価22円）
・送料実費 B・6版 40頁

『修養めぐり』

・一部百円（会員のかたは90円）・送料実費
・円紙33枚タテ37cmヨコ13cm
・見本お申しこみは百五十円お送り下さい

お早目にお申込み下さい

発行所 法然上人鑽仰会
電話(03)二六二一五九四四番

ふる里紀行

《2》

東北の一

「お山参詣」

青森北津軽 大屋 瑞彦

公害もいろいろあるが、空気や水の公害は
とてもやりきれない。

しかし、わがふる里「津軽」は、実にすば
らしい、澄みきった、すきとおるような青い
空、そして太陽が恰も岩木山の肩をすべり落
ちるように西方静かに没しようとする秋の夕
ぐれ、又、夜は星の数を数えながら虫の声を
聞く、冴えわたるような、まあ、そんなとこ
ろである。

この地方には、ツイタチ山（旧八月一日）
「お山参詣」という行事がある。

津軽富士といわれる岩木山は、津軽の下真
中にあり高さ一、六二五米、昔から信仰の山
で、歴史も古く、記録には、寛治五年（一、
〇九一年）というから凡そ九百年近い。

この時唱える文句がある

サイギ サイギ

ドッコイ サイギ

オヤマサ ハツダイ

コンゴロ ドーサ

イーツニナノハイ

ナムキンミヨウ チョウライ

さて、これがおわかりになりますか

「サイギサイギ」とは 懺悔懺悔

「ドッコイサイギ」とは 六根懺悔

「オヤマサハツダイ」は 御山（岩木山）に

八大

「コンゴロドーサ」は 金剛道者

「イーツニナノハイ」は 一々礼拝

「ナムキンミヨウ チョウライ」は 南無帰

命頂礼

まず、懺悔懺悔と称え、過去一切の罪業を
悔いあらため、次に人間六つの感覚の根元、
即ち眼、耳、鼻、舌、身、意の六根の迷いを
捨て身心清浄となり、金剛石のような、ゆる

がぬ信仰をもって、岩木のお山の八大の神々
（観音、弥勒、文殊、普賢、地藏、虚空蔵、
不動明王、金剛降三世）に一々礼拝し、自分
の全生命をささげて神仏に帰依するというの
である。

一般に知られている「六根清浄」の文より
はるかに意味深いものがある。

この唱文は、浄土宗、弘前貞昌寺二世、良
誉上人（現住赤平昌導師）による説が有力で
浄土宗と深い関係があるような気がする。

つまり、この唱文は、懺悔が強く強く出さ
れていることである。信機信法が示されてい
る、単に六根清浄の自力的においではない。

登山は確かに難行だったにちがいない。し
かし単に自力の修行ではなかった、飽くまで
も、懺悔、つまり、信機信法に支えられての
行であり、信行具足の姿なのである。又、一
々礼拝ということは、何か、一声一声、一息
一息の念仏の中に一步一步ふみしめ、大地に
正しく足をつけ、人生の山路をのぼりゆくよ
うな気がしてならない。

ことしの津軽は、冬のおとずれが早いとか
…今日も、岩木山は美しく、すがすがしい。



茗荷のたたリ

むかしあるところに、非常に慾張った宿屋の親爺がいた。

「この頃のようにこう不景気ではやり切れない。どうか沢山金をもっているお客でも来ないかな」

とこぼしている、時も時なら折も折、ちようどそこえ沢山の荷物をもつて、懷中にも大分金のありそうな旅人が、

「はい、ご免よ」

とやってきた。親爺はこいつはよいむく鳥がかかったわい」
と思つて、

「これはこれはお出でなさいまし、お泊りでございますか」

「ああ、今晚一夜厄介になりたい」

和来ばなし

というので早速女中に命じ、一番よい座敷へ通して、お茶よ、煙草盆よと世話をやいていた。やがて、女房に向い、

「おい、よい鳥がかかった。久方ぶりの上客だ。宿錢だけでは、いくらふんだくつたつて高が知れたこと、なんとかうまい工夫は無いかな」

といえ、慾にはまけぬ女房のこと、「宿賃は同業者の規約で無闇とあげられないし」と小首をかたむけて、しばし考えていたが、なにごとか親爺にささやいてにっこり笑う。親爺は突然女房の頬べたをビシヤリと打つてにらみつけ、

「馬鹿も休み休み云え。そんなことすりや早速明日は御用と手がうしろへ廻つて、臭い飯のご馳走だ。お前も太い女だな」

「そういうあなたも、やはり余り細いほうでもなさそうですね」

「おれは、それほど悪い量見は無いぞ、えーと、そうそう、それに限る」

と両手を打ちながら

「おい、なにをぼんやりしているんだい。

お客様に夕飯を仕度をしねえか、早く茗荷をどつさり買つておいで」

「なんだね、だしぬけにこの騒ぎは、晩のご馳走ならお惣菜もお魚もみんなそろえてありますよ。五人や十人のお客様に差支えるようなことはして置きませんよ」

と女房はすましたもの。

「えい、お前も血の廻りの鈍い女だな。茗荷のご馳走でうまくあの荷物をせしめるんだ」

「えっ、茗荷がおまじないになるんですか。何か良い考えが……」

と急に女房の機嫌は直った。

「うん、そうだよ。お前もいまだ茗荷の効能を知らないな、では話してやろう。あの茗荷っていうのは昔インドのお釈迦様のお弟子に、周利槃特という坊さんがいて……」

「おやおやお説教ですか」

「まあ黙って聞けよ。その坊さんは大變物おぼえが悪く、そのくせ直ぐに忘れてしまう。自分の名前さえ覚えていられないので、札を書いて貰って背負って歩き、他人に聞かれるとクルリとうしろを向いて見せたのだとき、所がその坊さんが死んだので埋めたら、その墓場へ生えたのが茗荷だ。何人でも食べると馬鹿になって、すぐ物忘れをするという話だ」

「へー、好いところへ気がついたのね。やはりあなたはえらいわ。では早速行つて来ますよ」

と相談一決して、八百屋から沢山茗荷を買つてきて膳部は残らず、吸物まで茗荷の入らぬものはなく、茗荷づくめで夕飯を出した。

「さあこれで大丈夫、行李も鞆もみんな忘れて行くだろう」と夫婦は喜んでその夜は寝たのである。

翌朝も昨晚のように、茗荷づくめでご馳走し、今か今かと客の出発するのを待っていた。やがて、思いがけなくも茗荷責めになった客は、「お客さん、お立ち」の聲に送られ

て挨拶をして出て行つた。親爺はうしろ姿を見送つて、

「おい、お客様は忘れ物をしたろう」

と女中をかえりみると、何も知らぬ女中は、

「いいえ、別に」

とげせぬ顔。親爺は、

「そんなことはない筈」

といきなり座敷へ飛び込んだ。女房もあとからすぐついてきて、

「あなた、行李は重いでしょう。鞆もありますか。おや、あなた何も無いじゃないですかと」

二人は部屋の真中にきょとんとしている。そこへ女中があわただしく飛んできて、

「旦那、旦那さま」

「おお、忘れ物があつたか、鞆か、財布か」

とどこまでも慾の皮をつっぱった云い方をした。すると女中は、

「いいえ、お客様は昨夜の宿賃を忘れて行つてしまいました。」

これを聞いた夫婦は、

「えっ、宿賃を忘れた、なんだ馬鹿々々しい」

とあきれて、聞いた口がふさがらなかつたと云うことである。

生きていたら自慢

若者たちが寄り集まつて、いろいろの話もし尽してしまい、ある一人が、

「おれは臨終のとき肺病を病んで死にたい」

い

というと、

「おれは恋病がよい」

「おれは禿頭病で死んでみたい」

「おれは商魂病とやらを病らつてみたい」

とそれぞれ勝手なことを云い合つた。

なかの一人は、

「頓死がよい。おれはきつと頓死するぞ」

といったが、案のじょう四、五日後に頓死してしまつた。友達が集まつて涙を流し、

「さてさて先日、あれが頓死するといつていたが、まことに可哀相なことさした」

と一同で悼みながら、その中の一人がいつ

た。

「さぞ、あれが生きていたら自慢するだらうな」

うな

おほかたこの信心の様を、人の意えわかぬとおぼゆるなり。心のそみぞみと身のけもいよだち、涙も落つるをのみ信の起ると申すは、ひがごとにてあるなり。

それは、歡喜、隨喜、悲喜とぞ申すべき。信といふは、疑ひに対するころにて、疑ひを除くを信とは申すべきなり。

みることに付けても、きくことに付けても、この事一定さぞとおもひとりつることは、人いかに申せとも、不定に思ひなすことはなきぞかし。

これこそ物を信ずるとは申せ。

——往生大要抄——

|| 信 ||

○
生きがいの根深となるものは信であるとおもう。ごく幼いころの信は、父母をはじめとする他人への信である。少年期になると、それに加えて、自分自身への信が生じてくる。いわゆる自信というものである。この時期に、この自信というものを心の奥に植えつけるか否かがおそらく、一生を左右するものであるようにおもえる。

カントは「自分自身をウジ虫にしてしまったものは、あとになって踏みにじられても不平を訴えることができない」といっている、これは権利の主張についていったものとおもわれるが、わたしは、それよりもっと以前に問題があるとおもう。

自分自身をウジ虫にしてしまったものは 便壺だけを自分の世界だと思いこむようになってしまう。もっと広い、もっと高い、もっと美しい世界に住むものを、羨やんだり、妬んだりしながらも、自分は、そこから抜け出られないものだと、きめこんでしまうのである。自分をウジ虫にしてしまうのは、つまるところ、自分の本質の尊厳さを知らず、自分の可能性をきわめて低い所に限定してしまうことである。だから高く飛び立つことができない。

自信とは、ちやうど、それと正反対の心の働きである。無意識のうちに自分自身の本質の尊厳さをつかみえた心境である。この世における自分の存在価値を、おぼろげながらも心につかみ取った状態なのである。だから、生きていく上に、これほど大切なものはないといってもよいだろう。

無意識のうちに感じとった自分の本質の尊厳さとか、おぼろげながらつかみ取った自分の存在価値というものを、意識の上にハッキリさせてみるとつぎのようになるとおもふ。

「自分がこうして存在しているのは、存在する理由があればこそだ。自分がこうして生きているのは、生きねばならぬ使命があるからなのだ」という意識である。すなわち、自分自身がこの宇宙にとって、ぬきさしならぬ存在であることを知るのである。

もし、その意識をもっともつと掘り下げていけば、ついに、「自分がこの宇宙の中心にすわっているのだ」と感じられるようになる。「たとえば、この身は微小であっても、宇宙は自分を中心として、回りに広がっているのだ」と、実感するようになる。

仏教に、「随所に主となる」という言葉がある。どこにいても、自分がその世界の主人公となる、という意味である。

ほんとうに自分の存在理由というものに目ざめ、自分の本質の尊厳さを知れば、そうならざるを得ない。どこにいても、自分が主体となり、宇宙の主人公である、という大自信をもたざるをえないのである。

○

それを可能にする唯一の道が宗教であると、わたしはおもう。とくに仏教は、すべての人を、そのような境地に導くことを窮極の目標とした教えであるといつてよい。

ほんものの自信というものは、現象の上に、どんな変化が起ろうと、けっして動揺すること、さ折することもない、ドッシリした重みをもつものである。そういう自信は、宇宙の生命と一体である自分の本質に目ざめることによってのみ生まれてくるものであって、他のいかなる道によっても得られるものではない。

「人間は宇宙の生命と一体である」という仏教のおしえは、真実に、すべての人を目ざめさせるところある。

人間は、国家、社会、家庭、職場など、何かしらのグループをつくり、そのグループに属して生活している。そして、その中の個人は、自分が、そのグループにとって価値ある存在であるかどうかを、心のどこかでいつも気にしているのだ。

ある。そして、確かに自分は仲間にとって価値がある、と自ら認めるとき、一種の気持ちの高揚を感じる。その気持ちの高揚を、誇りというのである。自分のなした行為が、確かに仲間のためになったという自覚をもち、その自覚に喜びを覚えるとき、その喜びの感情を、誇りというのである。これは純粹の意味の誇りである。

この純粹な誇りこそ、生きがいにつながるものである、生きがいの自覚というものはそういった誇りのなかにこそあ

る。「自分は会社のために役立っている人間である」「自分の仕事は世の進展に貢献しているのだ」といったような、誇りの意識が、いきいきとした生命の充実感を覚えさせ、あすへ立ち向かう勇気を奮いたたせるのである。その誇りは、ものに対する「ひたむきな心」から生ずる。お念仏は、うたがいの心なくただ「ひたむき」に信じ行ずるとき、自然にいきいきとした生命の充実感を味うことができるのである。

「報告」

第五回「浄土」文化講座

第五回「浄土」文化講座は、去る十月一日（木）午後五時より、東京文京区の名利伝通院において開催された。

当日は、ようやく秋の気色も感じられる中、東京の全真中とは思えぬ程の静寂な本堂での別時念仏に心なごむ中、伝通院住職大河内隆弘上人の「伝通院について」、大正大学教授佐藤良智先生の「法然上人の人生観」と題する講話があり、参会者全員に深い感銘を与え、八時過ぎ散会し

た。こうした会を意義あるものとするため、更に企画を練り、年末に第六回を開催いたしたく準備中です。多くの参会をお待ちしております。

なお当日の参会者は次の方々である。

秋元朝雄 磯部常治 大河内隆弘 大久保文雄
小柳晟 小菅和子 佐藤良智 佐藤間 桜庭俊海
関二三男 竹中信常 塚越ひさ子 遠田弘俊
中島真孝 原島農子 長谷川徳太郎 長谷川宣丈
福島純江 松川文豪 宮林昭彦 安居香山
吉田勇之助

（敬称略・五十音順）



道

菩提寺の道

高橋良和

法然上人の誕生の地、今の岡山県久米南町の誕生寺の山門を入ると、すぐ左手に大きないちようの木がある、樹齢八百年といういちようの木である。

その右側に小さいいちようの木が一本植樹されているが、これは今から三年前の日本ジヤンボリーの際に、浄土宗のボーイスカウトがこの寺で大会を開いたときに、記念として植樹したもので、樹齢八百年と比らべるとまるでひよこのような存在である。

然しそれでも、浄土宗のボーイスカウトが植えたもので、この木の成長とともに、ボーイスカウトの少年たちが、法然上人のお徳にあやかっ、て、すくすくのびてくれることを祈るものである。

ところで、はなしは事いちようの木のことである。

法然上人が勢至丸と呼ばれたころ、その父時国公が、源内武者定明のために夜討ちに遇ったあと、この勢至丸は、母の弟である観学得業（かんがくとくごう）という僧につれられて、菩提寺に入るのである。この菩提寺への入室は、おそらく勢至丸が、その仇の源内



武者定明から狙らわれていたからであると思われる。

もし出家することだけが念願であるなら、本山寺という寺だってある。この本山寺は、法然上人を生むについて、その母が祈願をこめた寺であり、その地方における名利であつて、本堂はもちろん、常行堂、法華堂、三重塔などがあり、伽藍として立派なものであるがそれに比らべてこの観学得業の菩提寺に今の津山市から北東、誕生寺から四十軒の日本原にある全くの小寺である。このような山深い寺を選らんだというところに、そうした考え方も出てくるのである。

それはとも角として、父の遺言により、この菩提寺に勢至丸があずけられる様子を、私日記という書物では、

「其時聖人同国内菩提寺法主観学得業の弟子と成り給う。」とある。

そこでこの勢至丸は、この菩提寺に入るが、菩提寺はその住職が学僧の観学得業であつて、この寺も学問寺であり、比叡山に勉強した観学が、ここで勢至丸をみっちり仕込むことになるのである。

そうして、自分が昔勉強した比叡山延暦寺の西塔北谷の持宝戾（じほうぼう）源光のもとにおくことになる。それに先立って勢至丸は母に永遠の別れをするために、昔の自分の邸宅である、今の誕生寺に帰ってくることになるが、そのとき、勢至丸は十三歳である。

菩提寺は閑静の地であつたが、那岐山を仰ぐ山深きところであり、かなり山道も長いだけに、叔父の観学得業は出発まぎわの勢至丸を呼びとめたのである。



勢至や、山をくだるのには、杖が必要があろう、この寺にあるいちようの木の枝をとって杖にかえたらどうだ。

観学得業のことばは、まことに親切そのものであった。

はい、それではこの一枝を折って、杖にさせていただきます。

勢至丸は、一本の細いいちようの枝を手折ったのである。

枝はてごろであった。わらじに食い入るような石ころの道を、杖をたよりくだる二人、

四十料という道のりだけに、やっぱり一日の距離である。

夕方、うっすら、もやがかかるところ、この誕生寺についた観学得業と勢至丸は、つかれを忘れて、母のあたたかい出迎えに一夜をすごしたことであろう。

そのとき勢至丸は思い出した。

母上さま、いよいよ比叡山に登ります、それにつきまして、そのかたみとして、たった一つ、勢至の心をつたえるのは、この杖でございます。

菩提寺からついてきた杖を、母の前にさしだした。

そうかえ、それをかたみにおいていってくれるか、それなら邸の庭に植えておこう。

勢至丸は、あくる朝、出発に際して、その杖を、その邸宅の一部に植えたのである。

送る母、送られる子、まことに偲びがたき情景であるが、母は、今植えたいちようの杖をじーっとなでながら、涙ぐんだことであらう。

勢至丸の影を追うとともに、やがて山かげにその姿が消えると母は思わずいちようのこの杖にすがりつくように足をがっくりさせたのであった。それから八百年、菩提寺からのいちようの杖は、樹齢八百年の誕生寺のいちようの木となったのである。



＝ダメークの塔＝

インドでの旅日記

＝ 第四回 ＝

佐藤 治子

ヤイナ教の聖地でもある。ガンジス河の水浴は他の土地でも見られるけれど、初転法輪の地鹿野苑もここより遠くはない、このペナレスのホテルでカバンを開け、身軽な服に着換え、走り書きするノートを手帳バックに入れ、心はずませ車へのりこんだ。

十七日。ペナレスへ一時二十分到着、宿舎のクラークホテルへ。庭に面した涼し気なロビーには外人達が丸テーブルを囲み雑談している。案内された二階の部屋のすぐ下は広い芝生があり、何という花だろうか朱色の美しい花が咲きみだれ、地面から円柱に伝わって二階の手すりまで伸び茂り、思わず足を止め見とれてしまう。

ペナレスは仏教の聖地の一つであり、またヒンズー教・ジ

市中を通り過ぎ、マンゴの大樹の続く並木通りをサルナートへ向う。鹿野苑のすぐわきの博物館を先に見学する。まず最初にアショカピラーの獅子頭のすばらしさに目をうばわれる。初転法輪の像として美術の本では何度か拝見した、マトウラ像がここに陳列されているのだ。そして大好きなガンダーラ仏。長年拝見しなれたガンダーラ仏の御顔をインドに来て拝めるという感激と、同時にこんな遠くに来ていることを忘れてしまう親しみを抱かせて頂けるのだ。嬉しさに一人で微笑しているのを感じる。マトウラ像もアグラ近くのマトウラの美術館で沢山拝めることだろう。

博物館を出てふりかえると、ダリヤの咲く芝生の向うにダ

メークの塔の上部が見えていた。

鹿野苑

お釈迦様は苦行されていた時、一緒に行をしていた五人の比丘をこの鹿野苑へ訪ねられた。苦行をすて山を降りられたお釈迦様に背をむけた五人の比丘達も、この場所で最初の説教を聞いてお釈迦様を師と仰ぎ、仏弟子となったところであり、仏教徒にとり深い由緒のあるこの土地も、回教徒の侵入により破壊されてしまったのだ。

赤土の上に礎石とレンガの塼の残った遺跡を歩く。折られたアシヨカピラーの墓が柵をめぐらした中に保存されている。博物館の庭から、ちらと眺められたダメークの塔は、その遺跡の右側にあるずんぐりとした円い塔だったのだ。その塔を一めぐりする、反対側の芝生にチベットのお坊さん達が大きな平たいおけに入れられた粉をこねている。も一人のお坊さんは小さい器を一杯ならべ、お供え物をする準備に余念がない。ダメークの大きな円い塔のその一隅は西日のかげとなり涼しい。二千有余年もたつこの大塔と、西日の中を昔を語る遺跡を参拝できた私には青芝の広場でお供物作りに余念ないラマ僧達の姿も尊く心に残る一風景であった。

この辺りは鹿が沢山いたにちがいない。鹿野苑の名にふさ

わしく、現在も鹿を飼っている園があるという。印度大菩提会の発願により建立されたという初転法輪寺を参拝したあと、近くの門の前へ廻された車の方へ戻った。ここにもブーゲンビリヤが咲きみだれている。

十八日。夜半に電話のベルが鳴る。急いで受話機をとりあげた。それは同行の一人の方が激しい腹痛にて、私がインドにおられたことのある知人から頂いたあの薬がほしいということであった。レインコートをはおり、急いでその薬をもつてその方の部屋へかけつけた。丁度午前二時。この朝は四時半頃起床して六時にはガンジス河へ行く予定であっただけに、気にしながら部屋に戻った。

ガンジス河

ガンジス河のことは予々きいていただけに、死体を火葬にされている光景を目の前にみたらどんな気持ちになるだろう。死期をこの河畔近い所で待つ人々の様子は？など自づと緊張してくるのが感じられる。車を降りると、ここからはばらばらにならぬようにと注意をうける。

河畔を歩いて行く人々や、道のかたわらでたむろしている人達が目に入ってはくるけれど、私は信仰の対象となっていないこの聖なる河の舟着き場に、案内者にくつつくようにして

歩いて行った。石段はベシヤベシヤとぬれている。小型の遊覧舟にのる。大きな声でお経をよむ声を後にして舟は岸を離れる。そのあたりは水浴している人達、水に入ろうとしている人達でにぎやかである。立派な建物が河を見下して並んでいる。建物の下に続く塀には平たいおまんじゅう型の牛ふんがペタペタと紋様をなしてほされてある。

アッ！火だ。まっ赤な焰！死体を焼いているのだ。不思議と気味わるいと思えない。椅子から立ち上り、焰に向って合掌する、後方の高い段の上には肉親が円をえがき座っている。何ともいえぬ崇高な気分にお十念をとなえるのだった。

舟はなお上流へ。少し離れた所には灰の山がみえる。そして山と積れたたきびが！その少しはなれた岸々はサリーのまま水浴をしている婦人達がいる。頭からすっぽり水中にかくれた女の人もいる。あの金色のつぼに水を入れ、高く捧げて東を向き水中から礼拝している人。舟は引き返していたのに、私は身も心もひきしまつて岸の方ばかりに気をとられてしまっていた。大分時間もたったのだろうか、往きに拝んだ火葬の火力もおとろえかかっている。河に突き出た木の台の上にお坊さんらしい人二人が東に向って坐禅している。石段には父親に連れられて水浴に来た子供もいる。往きよりずう

っと人が増えて、むらがつて水中にいる。サリーが身体にびたつとついていまま、裾の方の布の水をしぼっている婦人。小舟が近づいて来る。お珠数や首かざりを売りに舟すれすれにこいで来る。小さい木片やごみの浮いている水！僅かの時間の見学ではあった。けれどあの真剣さ！あの人達の信仰というか、最高の理想と考えられている水浴と死後灰を河に流してもらう一すじの願いにもえている、あの真剣さというか、私は実際にはきたないものであっても、きたないとか非常識とかいい切れない、あの人達の崇高な願いをそつとしてあげておきたいという気持で一杯であった。ロマンティックであろうか。それでもよい。ここを見学させてもらったことは、実に有意義であった。

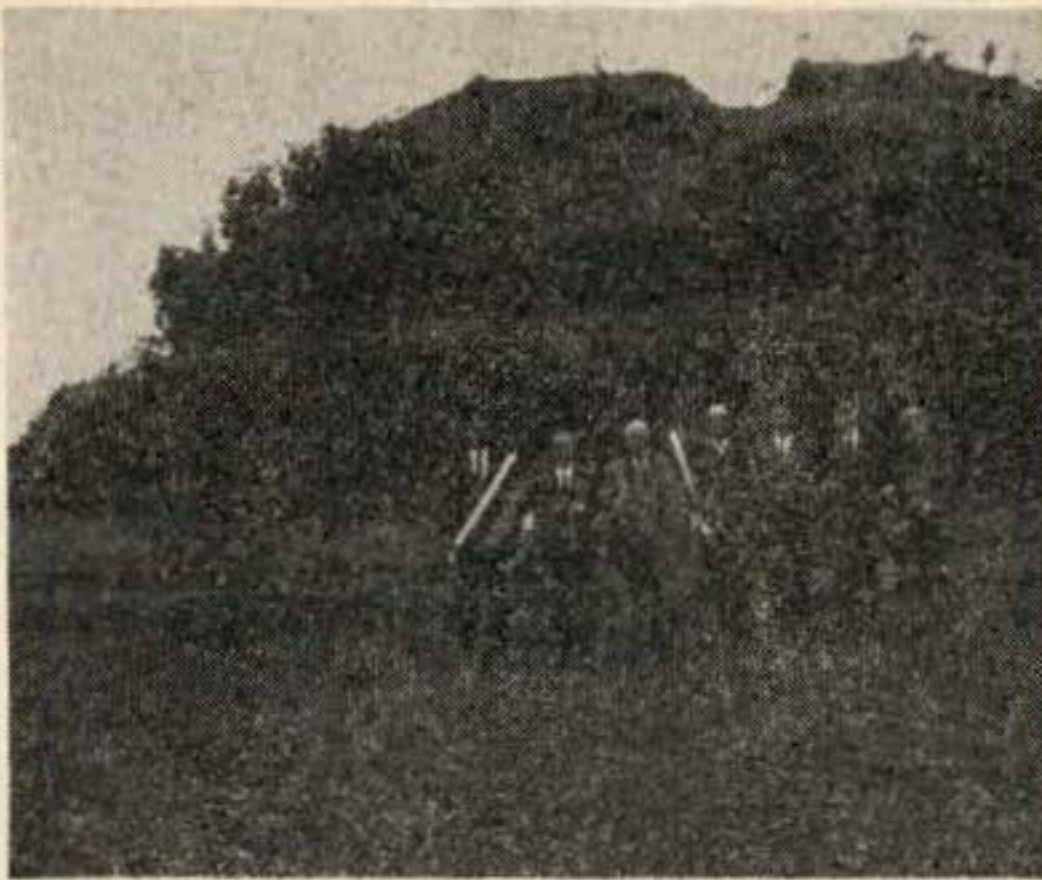
石段はすっかりぬれている。人一人がようやく歩ける通路を残し、あとは人が一杯すわり込んでいる。路上の床屋もいる。後でその中にライ病にかかっている人もいたと話された。私達はすぐ近くのゴールドテンンプルというジャイナ教の寺院へ行った。細い通路を一人ずつなつて歩く。牛が出て来た。私は狭い通路の家の壁にピタッとくっつくように立ってしまった。あの角でグイと押しつぶされるかも知れないとこわかった。

ホテルへ帰り朝食。テラスに咲きみだれる花、庭の青芝に、ガンス河での緊張はいつしかほごれていた。ほっとしてみる庭であった。

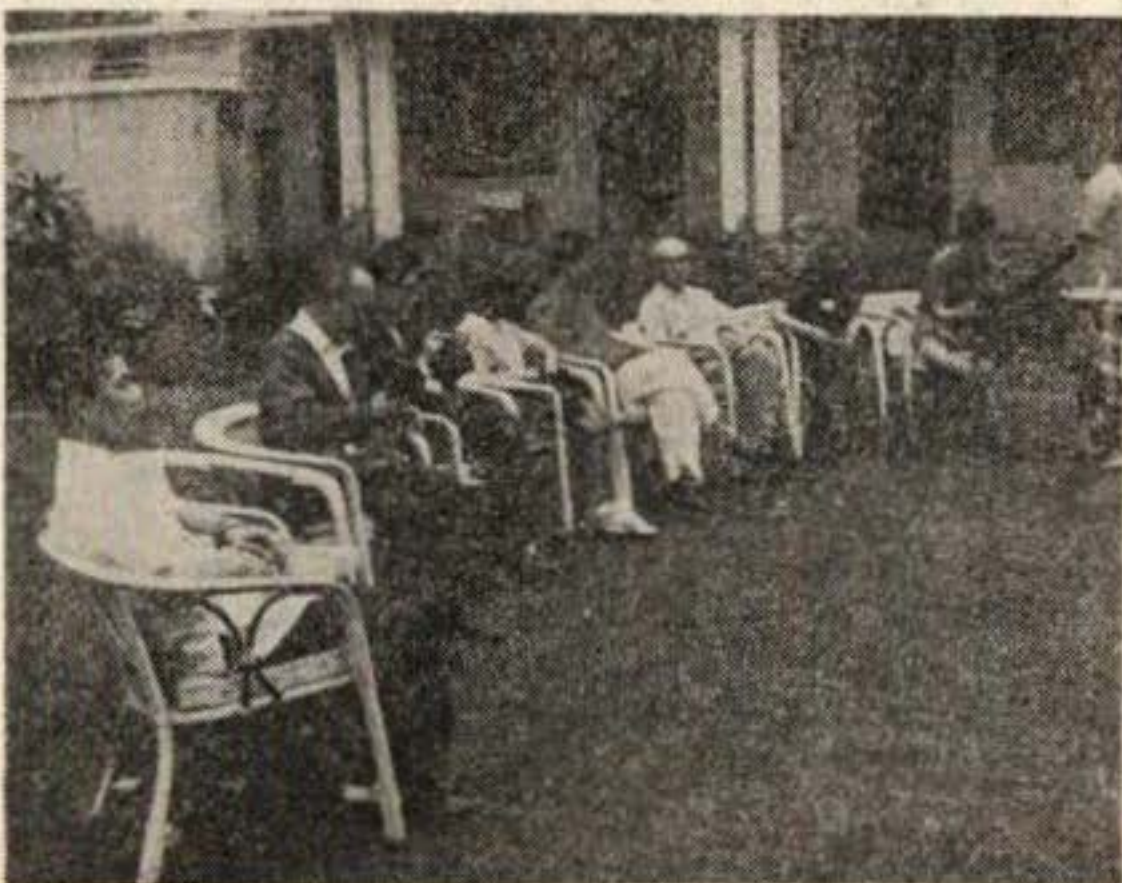
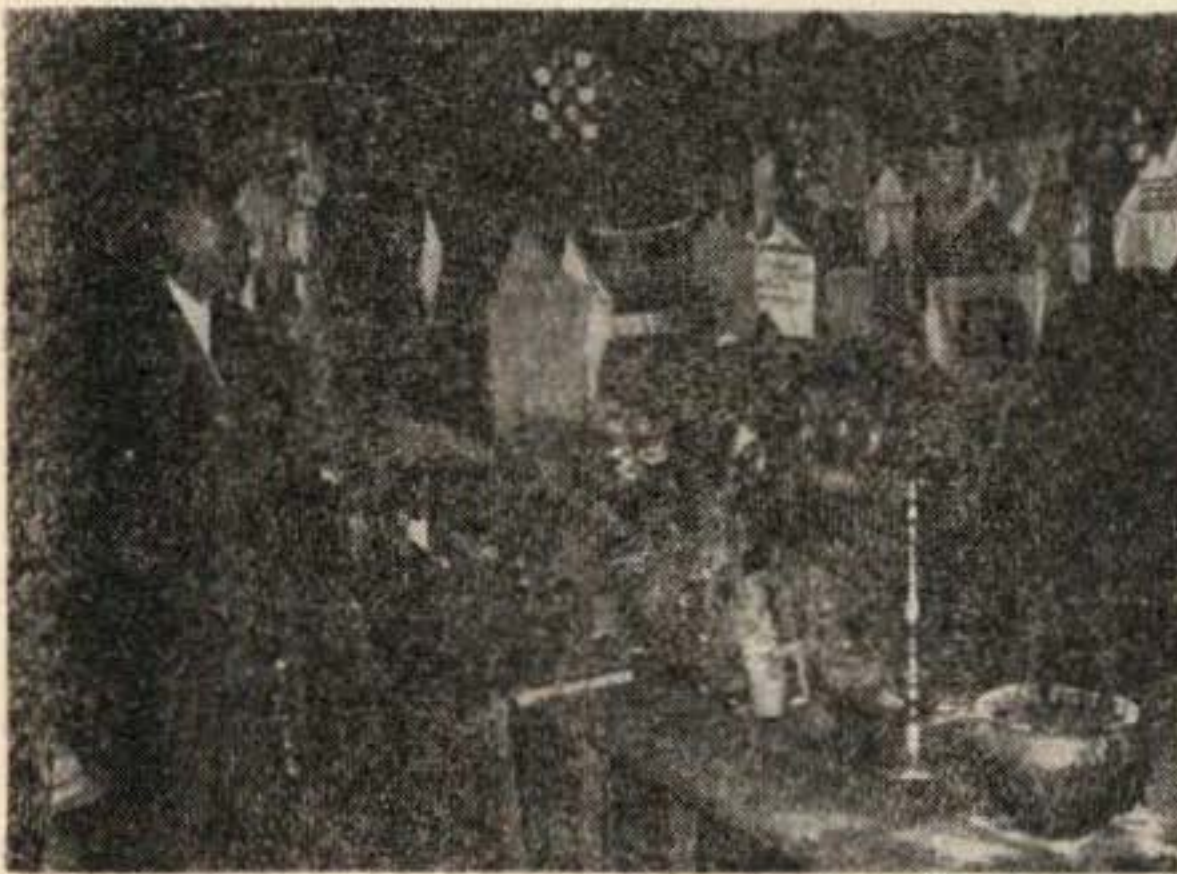
その後、織物工場を見学。その足であの五人の比丘が住まっていたという丘へ行った。おまんじゅう型の丘の上のレン

ガ造りの遺跡へ登って行った。ふと振りかえると土地の人達が私の方をみて何かいっている。手をふってみた。ワイワイと何かいいながら見上げていたその連中も手をふってくれ。『白髪の小母さんすべりますよ』とでもいっていたのかも知れない。

シヤカ涅槃像を拝す



クミナガラのおだび所の丘下で



ホテルでのヘビ使いを見学(ベナレス)

昼食後の一刻を芝生でへび使いやヨガをみる。へびを首にかけてみる先生もいる。背すじがぞっとする。

ヒンズー大学へ

たまたま食堂であつた日本からの留学生がヒンズー大学に
いるとのことで、その人が案内にたち大学へ向う。ものすごく
広い構内。奥まった所に礼拝堂があり、くつをぬいで入る。
仲々立派な建物。うす暗い奥まった所は中央にリングがあり、
長老らしき一老人が座っている。そこへ来る人は花を供え、
うやうやしく伏して礼拝する。私も丁寧に一礼する。さもない
と長老に一カッされそうな、きびしい態度の人であつた。

帰り径にモンキーテンプルへも寄る。ヒンズー教徒以外は
女だけお寺へ入れるという。お堂の屋根にも廊下にもサルが
沢山走り廻っている。私達はおサルを敬遠してしまった。

ホテルに戻ると、英国の植民地の習慣が未だに残っていて
お茶の時間。涼しげなロビーには外への旅行者が藤椅子にこ
しかけ、お茶をたのしんでいる。

その夜は初めての寝台車にのって、クミナガラへ立つこと
になっている私達は、部屋へ戻り荷物の整理にかかる。早目
の夕食をとり、八時出発。

寝台車

駅へ着くとあっちに一かたまり、こっちにも一かたまりと
浮浪者がいる。一寸気味がわるい。病気になったその方にき
たない所をみせぬように気づかいながら、長い通路を通りホ
ームへ歩く。ホームにも寝ている人がいる。寝台車にのって
ほっとした。夜行には強盗が入ることもあるから、ノックさ
れてもやたらに開けないようにと注意される。鍵をおろすテ
ストをしてみる。三重になっている。一二三とやってみる。
まあこれで大丈夫らしいと同宿の四人はほっとする。

クシナガラへ

十五日。六時四十分ゴラクブル着。私達は食堂へ案内さ
れ一休み。八時出発。町を出ると車はさとうきびの畠や大樹
の並木道を一路クシナガラへ向う。道ばたに人がしゃがんで
いる。少し行くと、また同じような格好をしてしゃがんでい
る。何をしているのだろう。あつ、用を足しているのだ。急
いで目をそらす。その近くを歩いて行く人、自転車で通り過
ぎる人、皆知らん顔で通って行く。初めはハッとした私達も
だんだん気にならなくなった。そういえば女の人は見かけな
い。女の人のためには御不浄があるのかしら。男の人達は身
体を白い布で上手にまきつけている。上着になり、ズボンに

なり、しやがむ時はまるで一休みしているポーズ。日本人には真似のできないしやごみ形なので、何をしているのだろうと不思議に思えたのも当然である。（「女の人は朝早く用を足すのです」ということを後で聞いた。）

クシナガラ

バンガローに着く。朝食をとり、十時半出発して、いよいよお釈迦様の入滅された遺跡を参拝するのだ。遺跡の中央に釈迦堂がある。クツをぬぎ、ねはんに入られた御姿が安置されている前で座り、読経が始まる。他に誰もいない。私達の一行の読経に、後に座って、只もう感激そのものであった。花を糸で小さい輪に作られたものが沢山お供えしてある。静かなお堂を一巡し、深々と礼拝してお堂を出る。

小雨にけぶる前庭の遺跡とこのお堂との中間にサラソ一樹が二本植っていた。この建物の裏にストーバーがある。足許に気を配りつつ一巡しておまいりする。車に戻った私達は雨が強くなってきた中を、少し離れたおだび所へ向う。

ホテルへ戻り一休み。午後三時、少し小降りになったらしい。再びおだび所へ参拝に向う。ブーゲンビリヤのピンクの花も、雫しているこの小高い丘のふもとで、暫くはおだび所をお守りするかのよう、静かに歩いたり丘を見上げたりし

ていた。

夕方からめっきり冷えて来た。御風呂のお湯もよく出ない。部屋に若い先生方が集って講義が始まる。私もノートをとり出した。人里はなれた一軒宿。足が冷える。その夜の星空の美しかったこと！忘れられぬクシナガラでの一夜であった。

二十日。朝早く庭に出てみる。激しく降った雨がはれ、もやがたちこめている。ヴェートベンの田園交響楽が、ふっと心の中に湧きあがる。あの曲の中の嵐の去った静かな田園の風景そのものである。もやが流れて濃くうすく村の立木が現われ消えていく。立ち去りがたい美しさ！

今日は長距離ドライブ。いよいよネパール領ルンビニへ向うのだ。未だもやはれぬこの入滅の地クシナガラを六時出発。

お願い

先月号の北海道から始めました「ふる里紀行」、今月は大屋様お一人のみの寄稿となってしまいました。次月号より北から南へ下って続けていきたいと思ひます。依頼状が届かなくとも、お気軽にお寄せ下さい。

宝物シリーズ

<11>

定家（一一六二—一二四一）といえ、鎌倉初期の代表的な歌人として知られる。最初九条兼実の家司であったため源通親時代には恵まれなかった。けれど西園寺家との姻戚関係を通じて歌壇の主流となった。建仁元年（一二〇一）に後鳥羽上皇の院宣により、源通具ら五人と共に『新古今和歌集』の撰者となったことなどから歌壇の大御所とまでなった。晩年には『古今集』『土佐日記』などの古典の校訂に努力し歌論も多い。肉像画の様にその風貌も歌人として、貴族としてその高潔さと貴賤さを漂わせている。それに歌の特色も『古今集』の優雅な歌風に加えて『源氏物語』の情趣を受け入れ優美で奥深い情調を象徴的にうたいあげている。

彼には『明月記』という日記がある。一名『照光記』ともいわれているが、治承四年（一一八四）から嘉禎元年（一二三五）まで

の五六年間にわたり、貴族社会内部のことや、その所領のことなどから歌のこと、日常のことなどにわたっての詳細な記録がある。

彼は七十九歳で入寂しているけれど晩年の六年間の日記は欠けている。この日記を読むと、彼の内面のことが良くわかる。たとえば健康についてみると、「咳」というのが治承四年三月四日の条に初見される。しかも四十歳前後はそれが非常に多い。そればかりでなく。三十歳ころから脚、風、悩、不、腰、腫、臥、腹などの記載が非常に多い。四十歳代にはそれらに加えて熱、労などが加わり、「労」などは大変な箇所のにのぼる。五十歳代にはそれらに、老、瘡、齒、眼などが加わり、「腹」の記載が多い。彼の生涯を通じて「咳」になやまされたことは事実で「咳病尤甚」「咳病不快」（建暦六年九月二十二、三日の条）などと表現している。また「風」「熱」なども多い。「結核性の気管支炎」だと考証されている先学もいる。加えて下痢。ともかく少年期より病弱であり「よろず万病持ち」という表現があるが、まったく彼のためにある言葉といって過言ではない。「治療法

には「蛭」「針」「灸」などの記載がみられる。また彼の性格面をみてみると、何と愚痴、僻と思われる記載の非常に多いことである。たとへば自ら経済的に貧窮だとさかんに書いている。たしかにそうした時もあったけれど、彼一流の愚痴がそう書かせたものと思う。ともかく病弱であったことが彼の性格に大きく影響し、陰気な愚痴っぽい性格としてしまったのだろう。当然、これは歌にも影響したのだろう。彼の歌を考える時充分考えなくてはならないことである。彼の代表作に春の夜の夢の浮き橋とだえしてみねにわかるるよこ雲の空

（『新古今集』巻一—三十八）などから受ける情趣あふれる優柔さや肉像画から受ける高潔さなどからはその性格のミジソンも受けとれない。人間は得てして外見や表面だけでその人を評価しやすい。けれどそれが片手落であることはいうまでもない。感情の練磨による産物と、性格から排幹される感情とは同様であるように異っている。人間の性格ほど不思議なものもなからうし、人間臭さはどおもしろいものはない。（田中祥雄）

藤原定家像



武者小路公共氏 所蔵

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十五年十月二十五日印刷
昭和四十五年十一月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

日本仏教の成果 浄土教のあけぼの

覆刊のあいさつ

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局長 小林 大 巖
浄土宗宗務総長

「浄土宗全書」正統兩篇全巻の覆刻頒行発願以来二十余年、三四師友の契勸を忝うするも、該の資金面に困苦を覚ゆ。関連の近親宗派や、其他に援助を要めようにも、容易にその意をえず、仏祖の慰護と有縁の扶翼を念じつつ、浄土宗開宗八百年を目睫に迎え、焦心しきり願意の暢遂をして止まず。折から昨晚秋、有限会社山喜房仏書林代表取締役青木正雄氏から、師友を介して、該全書全巻の覆刻刊行に必須の財的法的などの一切責任荷負をはじめ、関連諸般の悉皆責務を社をあげて負担に当り、浄土宗や一般人士や社会に対しては、商賈営利を度外視して仏教精神の伝弘に立脚し、念仏信行の策勉奉仕に、赤誠一貫の確約で、覆刻発行に挺身従事の切望申請と、同願師友の激將に依恃し、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局の出版事業の一として、内外大方の覆刻刊行要請に応えるべく、初巻配本を、法然上人聖誕日の四月七日と定めて宿志の具現に、山喜房仏書林の切願を聴諾したのである。この覆刻刊行に際し、師友を煩して、底本の由来や校正の頗未解説や爾来の研考様子の等々を、その責任分担で附すを念いしも先ず覆行をと急ぎて、夫等は他日を期した事情を諒察されたい。

いささか覆刻刊行の来由を略述して、念仏教学の師範人生行路の指標、教化振作の洪軌と仰ぎつつ、先聖の慈悲に報告して、信解行証の策勉を希念してたえない。

浄土宗全書

正 続
四十二卷

- ・ 予約申込規定 全四十二巻予約申込のみに限り出版します。
- ・ 定 価 各 巻 2.000円
- ・ 刊 行 期 日 昭和45年4月7日第一回第一巻発行 / 御申込みは下記発売所又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。 / 内容見本進呈

発行所 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

発売所 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4 東大赤門前
TEL 03-118-5361 振替東京1900